

## 世界の食料不安 (ライブラリー・コーナー)

著者	佐々木 茂子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	208
ページ	42-42
発行年	2013-01
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00003800">http://hdl.handle.net/2344/00003800</a>

## 世界の食料不安

佐々木茂子

一九九六年十一月、国連主催の世界食料サミットがローマで開かれ、FAO加盟国の代表が、途上国における飢餓、先進国と途上国の食糧供給の不均衡などの問題を討議した。そこで採択された「世界食糧安全保障に関するローマ宣言」は、世界の慢性的な栄養不足人口を二〇一五年までに半減させることを誓約した。しかし、世界では今も栄養不足人口が増え続けており、現在約一〇億人が飢餓に苦しんでいる。また、二〇〇七〜〇八年にかけて世界の主要穀物価格が高騰し、途上国の人々の生活を脅かしたことは記憶に新しい。

本稿はこうした背景のなか、二〇〇八年以降に刊行された食糧および食料問題に関する図書を紹介する。

FAOがまとめた『食料価格の高騰が食料安全保障に与える脅威と機会』（国際農林業協働協会 二〇一〇年）は、食料価格の上昇が、途上国に与えた影響を検証し、「ローマ宣言」の目標達成に基だし

い負荷を与えたと指摘する。また一方で、この危機がもたらすであろう小規模農業再発達の機会についても検証する。

二〇〇七〜〇八年の国際米価高騰に際し、コメの主たる輸出国であるタイ、ベトナム、インドがとった対応はそれぞれ異なるものであった。重富真一・久保研介・塚田和也著『アジア・コメ輸出大国と世界食料危機』（アジア経済研究所 二〇〇九年）は、この点に着目し、「なぜその国がある政策対応を選択したのか」を考察する。一方、清水達也編『変容する途上国のトウモロコシ需給 市場の統合と分離』（アジア経済研究所 二〇一一年）は、主食以外にも用途が広いトウモロコシについて、アメリカ、メキシコ、ブラジル、アルゼンチン、中国、タイ、東南部アフリカ諸国における供給構造と最近の変化を分析する。

近年新興国の台頭により、世界の資源・エネルギー事情が大きく変化した。後藤康浩著『資源・食糧・エネルギー

が変える世界』（日本経済新聞出版社 二〇一一年）はこれらの相互関係を重視しながら、今後のグローバル・バランスの行方を解説する。

環境問題対策として脚光を浴びたバイオ燃料は、その生産には大量のバイオマスを必要とし、食料生産との競合が発生する。川島博之著『世界の食料生産とバイオマスエネルギー 二〇五〇年の展望』（東京大学出版会 二〇〇八年）は、世界の食料生産の現状と展望を歴史の流れのなかで捉え、総合的な視点から解説する。また、加藤信夫著『バイオ燃料と食・農・環境 リポート ブラジル・欧米・タイから』（創森社 二〇〇九年）は、主要国におけるバイオ燃料生産の現状と課題、さらに食糧や環境への影響について考察する。

世界の食料問題に関する図書の多くは、FAOなどの国際機関やアメリカ農務省が公表するデータに基づいて分析しているが、その内容は多岐にわたり結論は様々ではない。ジュリアン・クリブ著『九〇億人の食糧問題』（シーエムシー出版 二〇一一年）は、食糧価格高騰の裏側で進行す

る農地や水不足、土壌の劣化、汚染、農業部門への投資低迷など逼迫した農業の現状を訴え、世界人口が九〇億人に達する二〇五〇年までに我々が取り組むべき課題を提起する。

ブラジル在住のジャン・イヴ・カルファンタン著『世界食糧ショック 黒いシナリオと緑のシナリオ』（NTT出版 二〇〇九年）は、食糧の安定供給のために取り組むべき課題について詳述し、二つの現実的なシナリオを提示する。また、主にEUやアフリカ諸国を事例として、遺伝子組み換え作物支持など、農業や貿易政策について提言する。

低コスト・大量生産モデルの拡大が、その恩恵とともに、負の要素も世界に広めたとするポール・ロバーツ著『食の終焉 グローバル経済がもたらしたもうひとつの危機』（ダイヤモンド社 二〇一二年）は、食の巨大なサプライチェーンの実態を伝え、ラジパテル著『肥満と飢餓 世界フード・ビジネスの不幸のシステム』（作品社 二〇一〇年）は、「世界の農民と消費者を不幸にするグローバル・フードシステムの現状を取り上げる。さらに、「グローバ

ル資本主義」が途上国を新植民地主義的に支配すると指摘するのは、スーザン・ジョージ著『これは誰の危機か、未来は誰のものか なぜ一%にも満たない富裕層が世界を支配するのか』（岩波書店 二〇一一年）である。

現在食糧供給への不安から、世界規模で農地獲得の動きが加速している。NHK食料危機取材班著『ランドラッシュ 激化する世界農地争奪戦』（新潮社 二〇一〇年）は、中国、インド、韓国などがウクライナやアフリカの農地を大規模に借り上げ、食糧生産に突き進む姿を取材する。

最後に、飢餓人口の半数を占めると言われるアフリカについては、ロジャー・サロー、スコット・キルマン共著『飢える大陸アフリカ 先進国の余剰がうみだす飢餓という名の人災』（悠書館 二〇一一年）が、飢餓の原因は干ばつなどの自然災害だけではなく、世界の食糧供給のあり方や我々の無知・怠慢によることを本書で明らかにし、この現実を変えようとする世界のさまざまな試みを報告する。（せさき しげこ／アジア経済研究所図書館）